慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヤコフツェフスキー著 石川郁男訳 封建農奴制ロシヤにおける商人資本
Sub Title	
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.12 (1956. 12) ,p.906(70)- 909(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19561201-0070
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561201-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ないのと同様に、計畫すなわち譏從を意味しない。自由は自由の秩序を持つ。秩序は個人を拘束するものである。もし個人が著者のいう如き實存的な個人、自由な決意と責任をもち、自己目的を追求する個人であるならば、彼は永遠に卽物化の矛盾に惱むのではなかろうか。（A5判、一六九頁、春秋社、昭和三十年、二五〇圓）

（氣賀　健三）

ヤコフツェフスキー著
石川郁男譯

『封建農奴制ロシヤにおける商人資本』

著者ヤコフツェフスキーはソ同盟科學院經濟研究所員、現在アカデミー經濟學會會員候補で、いくつかの共同研究、討論會において活躍しており、たとえば、一九五三年一〇月の「封建時代のロシアにおける商品生産の發展」にかんする討論、ソ同盟科學院歴史研究所ソ同盟封建制時代史部の發案になる「ロシアにおける『原始的蓄積』にかんする理論協議會」などにおいて積極的な發言をしている新進の經濟史家である。本書は彼がアカデミー經濟學會に提出した學位論文で、一九五三年に出版されたものであるが、その出版の直後（一九五三年一二月）、『歴史學の諸問題』誌編集部によつて合評會がもたれ、ベ・ベ・カーフェンガウス、エヌ・エム・ドゥルジーニン、エス、ゲ・ストゥルーミリンなどの著名な歴史學者が參加し、活潑な討論が行われたことからみて、ソ同盟においてかなり注目すべき勞作であつたことが推察される（cm.《Вопросы Истории》, 1954, Но. 1.）。

本書における著者の目的は「具體的な史料にもとづいて、封建的＝農奴制的ロシアにおける商品生産および流通の發展と役割とを、明らかにすること」（六頁）であり、從つて、この研究は「商業資本の發展における第一の歴史的時期」（一〇頁）、すなわち、産業資本に從屬して「生産的資本の代理者としてのみ機能」する産業資本主義時代の商業資本ではなく、それ以前の、いわゆる「前期的資本」としての商人資本にかぎられる。

著者は、この前期的商人資本の歴史を二つの基本的な段階にわけ、第一段階を「資本の運用と發展との主な部面が外國貿易であつた」時期とし、第一章「一七世紀中頃までのロシア外國貿易における商人資本の發展」としてまとめ、第二段階を「一七世紀中頃から、國内市場への商人の力強い定着がはじまり、商人資本〔が〕自國の生産者間の取引の仲介者となつた」（四四頁）時期として、第二章「一八世紀のロシア國内市場における商人資本の發展」において考察している。ヤコフツェフスキーによれば、この第二段階になると、國内市場において、かつてはおおむね價値どおりにおこなわれていた商業が「不等價的なものとなる」（一二頁）。そこで、「かつて商人が、地主から商品を安い價格で買うことによつて、すなわち、すでにりやく奪されたものの再分配によつてもうけていたとすれば、今度は、彼自らが、農民や手工業者を收奪し、欺まんし、搾取しはじめる」（一三頁）ことが豐富な原資料によりつつ解明される。しかし、商人資本の第一段階から第二段階への發展または移行の必然性の論證は充分になされていない。商人資本の外國貿易から國内市場への定着が「うちつづく社會的分業の過程と國税や地主の貨幣貢租の增大にもとづ」くものである（四四頁）としても、一八世紀のロシアにおける商人資本が「ギルド資本と商賣する農奴的農民の資本という二つのことなつた形で形成された」（七三頁）のと同様に、外國貿易にたずさわつている商人資本とは別個に、國内市場において形成されてきた商人資本の擡頭に對する前者の對應關係として第一段階から第二段階への發展を考えるべきではなかつたろうか？　第一段階から第二段階への發展を直線的な移行と考えることは、商人資本の蓄積の出發點を外國貿易にのみ歸着せしめることになり、外國貿易の過大評價となるであろう。この點、ソ同盟における本書の合評會においてベ・ゲ・ルインドジュンスキーによつても批判されたところであるが、とくに同合評會においてベ・エフ・バカノフが「商人資本發展區分の圖式をつくる必要はまつたくなく、必要なことは、交換の發展過程を全體的に區分し、それによつて全ロシア市場の確立及び國内市場の發展の時期を明確にすることである」と指摘したことは正鵠をえたものといえよう。

第三章「一八世紀ロシアにおけるギルド商人階級」においては「階級としての商人階級の形成」が「一八世紀中頃におこなわれた」ことを指摘しつつ「商業資本の代表者を、ギルド商人階級に歸することはできない。ギルド商人は必ずしも事實上の商人だとはかぎらないし、それに、商業を營んでいたのは、ギルド商人だけではなかつた」（二四頁）ことを證明するために各縣における「ギルド商人」の具體的な内容を詳細に描く。

以上の三章によつて、商人階級による市場征服の過程が論述され、「商業へのありとあらゆる參加を、商人活動と同視する」あやまりをおかしたエム・エヌ・ポクロフスキー『學派』の商業資本主義の概念を批判しつつ、著者自身の嚴密な意味での商人の概念規定が具體化されている。彼によれば、商人資本の代表者としての嚴密なる意味での商人とは、「第一に、自己生産（農民や手工業者がやるような）をせず、また商品を（ローマそのほかの征服者のように）直接のりやく奪によつて、あるいは（封建領主たちのように）貢物および租税、賦役および貢租としてうけとるのではなしに買入れ、買入れた商品をあきなうもの……、第二に、この同じ買入れた商品を（資本家や手工業者とちがつて）加工せずに販賣するために買入れるもの……、第三に、もうけをえるために商品を販賣するもの」（一三―一四頁）である。

第四章「價格と商業利潤」、第五章「商品輸送と利潤」は、本書の理論的中核をなすものである。第四章においては、商人資本は直接生産者を「勞働過程において直接に搾取することはでき」ず、「直接生産者の搾取は、市場關係、價格、不等價交換を通じてのみ商人によつて實現され」（一二四頁）ることを明らかにし、不等價交換こそが「商人資本が存在するための不可缺の條件であつた」（一二五頁）となして、「商業利潤率にとつて重要なのは、價格の高さではなくて、……價格の差である」（同上）ことを剔抉する。そのことが具體的な資料をもつて、異なつた市場における價格差、同一市場における同一商品の價格の季節的變動と商業利潤との關係をとりあげるな

かで解明される。更に「農民の積荷および商店から賣るさいの、同一商品の同一時期における價格の相違の商人資本による利用」（一四七頁以下）を考察して、そこでえられる商業利潤は「農奴的農民の不拂勞働」であることを明らかにし、「地主によつて農奴的農民からりやく奪されたものの再分配」（一五一頁）としての商業利潤との差別性を指摘する。

第五章では、商業利潤の本質を純粹な形でとりあつかうために除かれていた「商品の輸送および保管に投下された商人資本」を考察し、「輸送に對する貨幣の投下は、商業利潤を減少する出費ではなくて、輸送勞働者の搾取によつて商人に利潤をもたらす資本の使用である」（一六四頁）ことを明らかにしているのであるが、とくに、商品の買入資本と輸送のための資本との分割と前期的商人資本の一般的利潤率との關係、「輸送による『出費』の高さと商人の行動範圍」との關係、及び「買入價格に對する販賣價格の高さと商人の活動範圍」との關係、等における法則性の檢出（一六四―一六五頁）、更に、輸送が請負人によつて行われる場合の輸送費を取扱う場合、それが商人によつて「請負人に支拂われた費用なのか、または請負人によつて雇用勞働者に支拂われた費用なのかをはつきり」（一七二頁）區別して考察すべきことを鋭く指摘したことは、本書における理論的白眉の箇所といえよう。しかし、第四章においては同一市場における同一商品の價格の季節的變動と商業利潤との關係をとりあげていながら、保管費の價値論的分析に全くふれていないのは本書の體系における缺陥といわなければならない。

第六章「利潤のための鬪い」は、「すでに獲得された利潤、かき集められた資本の再分配、すなわち、小商人の沒落および第一級商人の手中への資本の集中にもとづく資本の集中化について」（二一二頁）論じられたもので、國内商人と外國商人、ギルド商人相互間、農民的商人とギルド商人との間の、それぞれの利潤獲得のための鬪いが史料によつて具體的にえがきだされている。

封建社會における商人階級と貴族階級との間の經濟的相互關係にかんする問題を取扱つた第七章「貴族と商人」においては、兩者の關係を「剰餘生産物の分配および分配率」（二三七頁）の問題として把握し、商人が封建的な經濟機構に吸着して土地所有者としての貴族の受取つた地代の再分配にあずかる點のみならず、封建社會における專賣制度を分析して「國家豫算および個々の貴族の專賣による收入「が」商人利潤の變形である」（二五〇頁）ことが剔抉されている。往々にして、土地所有者としての領主と商人を、封建社會における經濟的支配者層として一括するにとどまる傾向に對して「剰餘生産物の分配率をめぐる鬪い」（二五七頁）として「彼らの經濟的關係」を正しく位置づけつつ、商人階級が「封建的＝農奴制的體制における不可缺の環」（同上）であることを明らかにしたことは、從來、特權商人というかたちで、商人資本の側からのみ考察されがちであつた特權制度を封建體制の側から位地付けたものとして封建制度の研究を一歩前進せしめたものといえよう。しかし、貴族の專賣による收入が「商人利潤の變形である」とするならば、それは專賣特權商人の「獨占價格」を媒介とするものであるが故に、專賣制度を「直接生産者の不拂勞働の追加的な搾取制度」（二五一頁）と規定するためには、獨占價格論の視角からのなお多くの論證を必要とするものといわねばならない。

第八章「商人資本の産業資本への屈服」においては、その過程を次のように説明している。「流通部面の資本としての商人資本は、たんに商品價格に働きかけ得るだけであり、その價値に働きかけることはできなかつた。利潤の獲得は、個々の商品の生産價値の低下によつてではなく、價値以下の買入れと價値以上の販賣によつて、すなわち不等價交換によつて、おこなわれた。商業の發展、全ロシア的市場の強化および商人の獨占の衰退とともに、賣買差額は減少した。これらの條件において、商人は商品價値の低下によつてのみ利潤をふやすことができたが、このためには、彼は、生産に從事し、流通部面を通じての直接生産者の搾取から生産部面におけるその直接的搾取に移らなければならなかつた。一九世紀に、多數の商人が、製造所および工場を獲得して生産活動に移り、資本が流通部面から生産部面に移動しはじめた」（二六五―二六六頁）。

かかる敍述によつて明らかな如く、「商人資本の産業資本への屈服」はヤコブツェフスキーにおいては、商人資本の産業資本への單なる移行としてとらえられており、資本制的生産樣式の發生・發展が、直接生産者が資本家となる經路と商人資本が産業資本家となる經路との對抗關係のなかでとらえられていない。

それ故に、「むすび」において、「商人資本の歴史的役割」をマルクス・レーニンの言葉を引用しつつ明らかにせんとしつつも、引用文の公式的解説に終らざるを得なかつたのである。「商人資本は流通部面に奉仕し、それゆえに、新しい生産樣式をつくりだせ」ず、「後者の發生のための條件をつくりだしたにすぎなかつた」（二八四頁）とするならば、商人資本がつくりだした條件のもとにおいて資本制生産樣式が如何に發生し、封建社會内部においてはぐくまれ擡頭してきた「下からの」資本とどのように對應しつつ産業資本に轉化して行つたかが究明されなければならなかつたのであつて、「商人資本の流通面から生産部面への移行」の條件を單に「商品價格の平均化およびこれと關連する商業利潤率の低下」（二八四頁）に解消してはならなかつたのである。

以上、氣のついた若干の點を指摘しつつ概觀的に考察してきたのであるが、その他の點については「譯者あとがき」に詳しいので省略する。なお、本書は最初、先學宇尾野久氏が書評することになつており、氏は既に十枚近くの原稿を用意されていたにもかかわらず、本書の書評を私にすすめられ、玉稿の參考まで許された。紙上をかりて御禮申上げるとともに、御期待にそえなかつたことをお詫びしたい。（A5判、三一八頁、未來社、一九五六年六月三〇日、定價五八〇圓）

（常盤　政治）